

# 鳥の北斗七星

宮沢賢治

青空文庫



つめたいいぢの悪い雲が、地べたにすれすれに垂れましたので、野はらは雪のあかりだか、日のあかりだか判らないやうになりました。

烏からすの義勇艦隊は、その雲にお圧しつけられて、しかたなくちよつとの間、とたん亜鉛の板をひらげたやうな雪の田圃たんぼのうへに横にならんで仮泊といふことをやりました。

どの艦ふねもすこしも動きません。

まつ黒くなめらかな烏の大尉、若い艦隊長もしやんと立つたまゝうごきません。

からすの大監督はなほさううごきもゆらぎもいたしません。からすの大監督は、もうずるぶんの年としよ老りです。眼が灰いろになつてしまつてゐますし、啼なくとまるで悪い人形のやうにギイギイ云いひます。

それですから、烏の年とし齢を見分ける法を知らない一人の子供が、いつか斯かう云つたのでした。

「おい、この町には咽喉のどのこはれた烏が二疋ひきあるんだよ。おい。」

これはたしかに間違ひで、一疋しか居をりませんでしたし、それも決してのどが壊れたのではなく、あんまり永い間、空で号令したために、すっかり声が錆さびびたのです。それですか

ら鳥の義勇艦隊は、その声をあらゆる音の中で一等だと思つてゐました。

雪のうへに、仮泊といふことをやつてゐる鳥の艦隊は、石ころのやうです。胡麻ごまつぶのやうです。また望遠鏡でよくみると、大きなや小さなのがあつて馬鈴薯ばれいしょのやうです。

しかしだんだん夕方になりました。

雲がやつと少し上の方にのぼりましたので、とにかく鳥の飛ぶくらゐのすき間ができませんでした。

そこで大監督が息を切らして号令を掛けます。

「演習はじめおいつ、出発」

艦隊長鳥の大尉が、まつさきにはつと雪を叩たたきつけて飛びあがりました。鳥の大尉の部下が十八隻、順々に飛びあがつて大尉に続いてきちんと間隔をとつて進みました。

それから戦闘艦隊が三十二隻、次々に出発し、その次に大監督の大艦長が厳かに舞ひあがりました。

そのときはもうまつ先の鳥の大尉は、四へんほど空で螺旋うづを巻いてしまつて雲の鼻つ端まで行つて、そこからこんどはまつ直すぐに向ふの柱もりに進むところでした。

二十九隻の巡洋艦、二十五隻の砲艦が、だんだんだんだん飛びあがりました。おしまひ

の二隻は、いつしよに出発しました。こゝらがどうも鳥の軍隊の不規律なところでは、

鳥の大尉は、杜のすぐ近くまで行つて、左に曲がりました。

そのとき鳥の大監督が、「大砲撃てつ。」と号令しました。

艦隊は一斉に、ががががががが、大砲をうちました。

大砲をうつとき、片脚をぷんとうしろへ挙げる艦ふねは、この前のニダナトラの戦役での負傷兵で、音がまだ脚の神経にひびくのです。

さて、空を大きく四へん廻つたとき、大監督が、

「分れつ、解散」と云ひながら、列をはなれて杉の木の大監督官舎におりました。みんな列をほごしてじぶんの営舎に帰りました。

鳥の大尉は、けれども、すぐに自分の営舎に帰らないで、ひとり、西のはうのさいかちからすの木に行きました。

雲はうす黒く、たゞ西の山のうへだけ濁つた水色の天の淵ふちがのぞいて底光りしてゐます。そこで鳥仲間ともでマシリイと呼ぶ銀の一つ星がひらめきはじめました。

鳥の大尉は、矢のやうにさいかちの枝えだに下りました。その枝に、さつきからじつと停とまつて、ものを案じてゐる鳥があります。それはいちばん声のいゝ砲艦で、鳥の大尉の許いひなづ

嫁けでした。

「があがあ、遅くなつて失敬。今日の演習で疲れないかい。」

「かあお、ずるぶんお待ちしたわ。いつかうつかれなくてよ。」

「さうか。それは結構だ。しかしおれはこんどしばらくおまへと別れなければなるまいよ。」

「あら、どうして、まあ大へんだわ。」

「戦闘艦隊長のはなしでは、おれはあした山鳥を追ひに行くのださうだ。」

「まあ、山鳥は強いのでせう。」

「うん、眼玉が出しやばつて、くちばし嘴が細くて、ちよつと見掛けは偉さうだよ。しかし訳ないよ。」

「ほんたう。」

「大丈夫さ。しかしもちろん戦争のことだから、どういふ張合でどんなことがあるかもわからない。そのときはおまへはね、おれとの約束はすっかり消えたんだから、ほか外へ嫁いつてくれ。」

「あら、どうしませう。まあ、大へんだわ。あんまりひどいわ、あんまりひどいわ。それ

ではあたし、あんまりひどいわ、かあお、かあお、かあお、かあお」

「泣くな、みつともない。そら、たれか来た。」

鳥の大尉の部下、鳥の兵曹長へいさうちやうが急いでやってきて、首をちよつと横にかしげて礼をして云ひました。

「があ、艦長殿、点呼の時間でございます。一同整列して居をります。」

「よろしい。本艦は即刻帰隊する。おまへは先に帰つてよろしい。」

「承知いたしました。」兵曹長は飛んで行きます。

「さあ、泣くな。あした、も一度列の中で会へるだらう。」

。丈夫であるんだぞ。おい、お前ももう点呼だらう、すぐ帰らなくてはいかん。手を出せ」

二疋ひきはしつかり手を握りました。大尉はそれから枝をけつて、急いでじぶんの隊に帰りました。娘の鳥は、もう枝に凍り着いたやうに、じつとして動きません。

夜になりました。

それから夜中になりました。

雲がすつかり消えて、新らしく灼やかれた鋼の空に、つめたいつめたい光がみなぎり、小

さな星がいくつか聯合れんがふして爆発をやり、水車の心棒がキイキイ云ひます。

「たうとう薄い鋼の空に、ピチリと裂罅ひびがはひつて、まつ二つに開き、その裂け目から、あやしい長い腕がたくさんぶら下つて、鳥を握つかんで空の天井の向ふ側へ持つて行かうとします。鳥の義勇艦隊はもう総掛りです。みんな急いで黒い股引ももひきをはいて一生けん命宙をかけめぐります。兄貴の鳥も弟をかばふ暇がなく、恋人同志もたびたびひどくぶつつかり合ひます。

いや、ちがひました。

さうぢやありません。

月が出たのです。青いひしげた二十日の月が、東の山から泣いて登つてきたのです。そこで鳥の軍隊はもうすつかり安心してしまひました。

たちまち杜もりはしづかになつて、たゞおびえて脚をふみはづした若い水兵が、びつくりして眼をさまして、があと一発、ねぼけ声の大砲を撃つただけでした。

ところが鳥の大尉は、眼が冴さえて眠れませんでした。

「おれはあした戦死するのだ。」大尉は眩つふやきながら、許いひなづけ嫁けのある杜の方にあたまを曲げました。

その昆布こんぶのやうな黒いなめらかな梢こすゑの中では、あの若い声のいゝ砲艦が、次から次といろいろな夢を見てゐるのでした。

鳥の大尉とたゞ二人、ばたばた羽をならし、たびたび顔を見合せながら、青黒い夜の空を、どこまでもどこまでものぼつて行きました。もうマヂエル様と呼ぶ鳥の北斗七星が、大きく近くなつて、その一つの星のなかに生えてゐる青じろい苹果りんごの木さへ、ありありと見えるころ、どうしたわけか二人とも、急にはねが石のやうにこはばつて、まつさかさまに落ちかゝりました。マヂエル様と叫びながら愕おどろいて眼をさましますと、ほんたうにからだ枝から落ちかゝつてゐます。急いではねをひろげ姿勢を直し、大尉の居る方を見ましたが、またいつかうとうとしますと、こんどは山鳥が鼻眼鏡はなめがねなどをかけてふたりの前にやつて来て、大尉に握手しようとしています。大尉が、いかんいかん、と云つて手をふりますと、山鳥はピカピカする拳銃ピストルを出していきなりずんと大尉を射殺いころし、大尉はなめらかな黒い胸を張つて倒れかゝります。マヂエル様と叫びながらまた愕いて眼をさますといふあんばいでした。

鳥の大尉はこちらで、その姿勢を直すはねの音から、そらのマヂエルを祈る声まですっかり聴いて居りました。

じぶんもまたためいきをついて、そのうつくしい七つのマヂエルの星を仰ぎながら、あゝ、あしたの戦たたかひでわたくしが勝つことがいゝのか、山鳥がかつのがいゝのかそれはわたくしにわかりません、たゞあなたのお考のとほりです、わたくしはわたくしにきまつたやうに力いつぱいたゝかひます、みんなみんなあなたのお考へのとほりですとしづかに祈つて居りました。そして東のそらには早くも少しの銀の光が湧わいたのです。

ふと遠い冷たい北の方で、なにか鍵かぎでも触れあつたやうなかなかな声がしました。鳥の大尉は夜間双眼鏡ナイトグラスを手早く取つて、きつとそちを見ました。星あかりのこちらのぼんやり白い峠くりの上に、一本の栗の木が見えました。その梢こすねにとまつて空を見あげてゐるものは、たしかに敵の山鳥です。大尉の胸は勇ましく躍りました。

「があ、非常召集、があ、非常召集」

大尉の部下はたちまち枝をけたてて飛びあがり大尉のまはりをかけめぐります。

「突貫。」鳥の大尉は先登になつてまつしぐらに北へ進みました。

もう東の空はあたらしく研いだ鋼のやうな白光です。

山鳥はあわてて枝をけ立てました。そして大きくはねをひろげて北の方へ遁にげ出さうとしましたが、もうそのときは駆逐艦たちはまはりをすつかり囲んでゐました。

「があ、があ、があ、があ、があ」大砲の音は耳もつんぼになりさうです。山鳥は仕方なく足をぐらぐらしながら上の方へ飛びあがりました。大尉はたちまちそれに追ひ付いて、そのまつくろな頭に鋭く一突き食らはせました。山鳥はよろよろつとなつて地面に落ちかかりました。そこを兵曹長へいさうちやうが横からもう一突きやりました。山鳥は灰いろのまぶたをとぢ、あけ方の峠の雪の上につめたく横よこたはりました。

「があ、兵曹長。その死骸しがいを営舎までもつて帰るやうに。があ。引き揚げつ。」  
 「かしこまりました。」強い兵曹長はその死骸しがいを提さげ、鳥の大尉はじぶんの杜もりの方に飛びはじめ十八隻はしたがひました。

杜に帰つて鳥の駆逐艦は、みなほうほう白い息をはきました。

「けがは無いか。誰たれかけがしたものは無いか。」鳥の大尉はみんなをいたはつてあるきました。

夜がすつかり明けました。

桃しるの果汁しるのやうな陽ひの光は、まづ山の雪にいつぱいに注ぎ、それからだんだんに流れて、つひにはそこらいちめん、雪のなかに白百合しろゆりの花を咲かせました。

きらぎらの太陽が、かなしいくらゐひかつて、東の雪の丘の上に懸りました。

「観兵式、用意つ、集れい。」大監督が叫びました。

「観兵式、用意つ、集れい。」各艦隊長が叫びました。

みんなすつかり雪のたんぼにならびました。

鳥の大尉は列からはなれて、ぴかぴかする雪の上を、足をすくすく延ばしてまつすぐに走つて大監督の前に行きました。

「報告、けふあげがた、セピラの峠の上に敵艦の碇ていはく泊はくを認めましたので、本艦隊は直ちに出勤、撃沈いたしました。わが軍死者なし。報告終りつ。」

駆逐艦隊はもうあんまりうれしくて、熱い涙をぼろぼろ雪の上にこぼしました。

鳥の大監督も、灰いろの眼から涙なみだをながして云ひました。

「ギイギイ、ご苦労だった。ご苦労だった。よくやつた。もうおまへは少佐になつてもいいだらう。おまへの部下の叙勲はおまへにまかせる。」

鳥の新らしい少佐は、お腹なかが空すいて山から出て来て、十九隻に囲まれて殺された、あの山鳥を思ひ出して、あたらしい涙をこぼしました。

「ありがたうございます。就つては敵の死骸を葬りたいとおもひますが、お許し下さいませうか。」

「よろしい。厚く葬つてやれ。」

烏からすの新らしい少佐は礼をして大監督の前をさがり、列に戻つて、いまマヂエルの星の居るあたりの青ぞらを仰ぎました。(あゝ、マヂエル様、どうか憎むことのできない敵を殺さないでいゝやうに早くこの世界がなりますやうに、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません。)マヂエルの星が、ちやうど来てゐるあたりの青ぞらから、青いひかりがうらうらと湧わきました。

美しくまつ黒な砲艦の烏は、そのあひだ中、みんなといつしよに、不動の姿勢をとつて列ならびながら、始終きらきらきら涙をこぼしました。砲艦長はそれを見ないふりしてゐました。あしたから、また許いひなづけ嫁といつしよに、演習ができるのです。あんまりうれしいので、たびたび嘴くちばしを大きくあけて、まつ赤に日光に透かせましたが、それも砲艦長は横を向いて見逃がしてゐました。



# 青空文庫情報

底本：「宮沢賢治全集8」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年1月28日第1刷発行

2004（平成16）年4月25日第20刷発行

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 烏の北斗七星

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>